

平成 28 年度 (2016) 第二回 GBIF 日本ノード運営委員会議事録

国立科学博物館 福田 知子

日時：平成 29 年 3 月 6 日 (月) 13:00-15:00

場所：AP 秋葉原 (〒110-0006 東京都台東区秋葉原 1-1)

参加者：松浦 (委員長)、大原 (副委員長)、伊藤、大澤、川越、細矢、矢後、山崎 (剛)、山崎 (由)、山野の各委員

オブザーバー：

深川 正夫 国立研究開発法人日本医療研究開発機構

笹土 隆雄 国立研究開発法人日本医療研究開発機構

荒牧 まりさ 環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室・室長補佐

美和 秀胤 環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室・係長

倉島 治 東京大学大学院 総合文化研究科

神保 宇嗣 国立科学博物館 動物研究部 陸上無脊椎動物研究グループ・研究主幹

戸津 久美子 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター・高度技能専門員

中江 雅典 国立科学博物館動物研究部 脊椎動物研究グループ・研究員

大下 美樹 国立科学博物館 研究推進課

渡辺 恭平 神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸部・学芸員

福田 知子 国立科学博物館 植物研究部 支援研究員

欠席者：城石・星・三橋の各委員 (委任状あり)、藤倉委員

報告事項

1. 国立科学博物館 (細矢)

- 1) ワークショップ 21 世紀の生物多様性研究 (通算第 11 回) 「つながる・ひろがる生物多様性情報」(2015 年 12 月 3 日、国立科学博物館日本館講堂)を開催した。
- 2) 第 28 回自然史標本データ整備事業による標本情報の発信に関する研究会を開催した。
- 3) サイエンスミュージアム・ネット (S-Net) の「自然史標本情報検索システム」の参加機関数・データ件数は、85 館 (大学 15 館、博物館 65 館、研究所 5 館)、約 449 万件となった (2017 年 2 月現在)。研究員・学芸員データベースは 505 名となった。
- 4) S-Net データの非公開データを削除・整理し、全データの内容をデータベースソフトに移行した。
- 5) GBIF 提供済データの利用条件をデータセットごとに CC ライセンスの設定 (CC0, CC BY, CC BY-NC) について設定した結果、1 館を除き回答の収集が完了した。
※会議後メモ：残る 1 館からも回答が来たため、全館の回答が得られた。

2. 東京大学 (伊藤)

- 1) 日本環境アセスメント学会特別集会 (2016 年 9 月 10 日、中央大学、東京) の報告

記事で GBIF の紹介、京都大学大学院人間・環境学研究科 主催の講演会「希少植物保全活動の最前線ー希少植物はいかに保全すべきなのだろうか」(2017 年 1 月 28 日、京都府立植物園、京都)にて域外保全データベースと QR コードを使用したネットワークの発表を行った。

- 2) 日本産維管束植物のチェックリスト「GreenList」(<http://www.rdplants.org/gl/>) を利用し、域外保全植物株の移動管理データベースを作成した。概要について 1) の講演会で報告した。
 - 3) 環境省・生物多様性センター保有の観察情報として、モニタリングサイト 1000 里地里山調査における鳥類 (103,069 件)、哺乳類 (24,860 件) のデータセットを遺伝研日本ノードから GBIF へ公開した。
 - 4) JBOLI WEB サイトの更新、および JBOLI WEB サーバマシン、OS、サーバアプリケーションのメンテナンスを継続的に行った。
3. 国立遺伝学研究所 (山崎由)
- 1) サーバマシンおよびポータルサイトをチェック、監視中。IPT.2.3.3 の VEX チェックを行った。GBIF が提供する Webservice API の一部についてチュートリアルを作成し公開した。
 - 2) GBIF へのデータ登録を行った。
 - 3) Green List var. 1.01 を追加した。新規追加和名は 5150 件である。
4. ワーキンググループ
- 1) S-Net 広報・普及活動を行った (研究会、NBRP 展示、沖縄での S-Net/GBIF 紹介など)。
 - 2) JBIF-J - OBIS 会合 (2/3、於 GODAC 国際海洋情報機構) に参加した。
 - 3) GBIF に提供済み全データに標本データの固有番号である UUID を付与した。
 - 4) BIFA (Biodiversity Information Fund for Asia, 環境省拠出金によるアジアにおける活動支援) 第 1 期の活動を終了した。
 - 5) NSG・科学委員会合同会合 (於コペンハーゲン GBIF 事務局) に参加し、情報・意見交換を行った。

審議事項

1. 国立科学博物館 (細矢)
 - 1) 毎年恒例の研究会・ワークショップを行う。
 - ・自然史標本情報の発信に関する研究会 (6 月・2 月)
 - ・分子生物学会 NBRP ブース (12 月、神戸)
 - ・ワークショップ「21 世紀の生物多様性研究 (通算第 12 回)」(12 月 9 日科博上野講堂)
 - 2) 標本情報の電子化・データベース構築
 - 引き続きサイエンスミュージアム・ネット (S-Net) のデータ拡充を行う。データの

収集～公表までの過程を整理し管理体制を強化する。研究員・学芸員データベースも充実させる。

- 3) 研究集会、ワークショップなどにより本事業の広報・普及をはかる。データ探索と、提供への理解促進のための活動を行い、新規参加についての体制を整える。

2. 東京大学（伊藤）

- 1) 国内外の会議・シンポジウムに出席し情報交換を行う。日本生態学会東京大会（2017年3月、早稲田大学、東京）のシンポジウム「Big Data Approaches to Ecology and Evolutionary Biology」にて「地球規模ネットワークによる生物多様性ビッグデータの集積・提供・利用」の発表を予定している。
- 2) GreenList の WEB 検索システムの最初の稼働版を年度内に完成させる。
- 3) 環境省・生物多様性センター保有の観察情報の生物分布情報（観察・観測データ）を登録可能なデータセットから随時登録する予定である。
- 4) 学名切り分けツールのテスト版を平成 29 年度第一四半期に完成させる予定である。

3. 国立遺伝学研究所（山崎）

- 1) 来年度の NBRP 予算配分について（質疑応答参照）
- 2) ポータルサイトの安定運用、GBIF へのデータ登録・公開を進める。

4. ワーキンググループ（細矢）

- 1) 研究会・ワークショップを開催する
 - ・第 29 回 自然史情報発信に関する研究会 2017.6.
 - ・GBIF ワークショップ 通算第 12 回 2017.12.3.
 - ・第 30 回 自然史情報発信に関する研究会 2018.（日程未定）
- 2) S-Net のデータ利用の推進、利用例の収集を継続する。
- 3) GBIF アジア会合：ベトナムにて拡大版の開催予定（2017.6.12-15 を予定）。
- 4) S-Net/GBIF 説明会（開催地・時期未定）
- 5) BIFA 関連に必要な応じて協力する。

<質疑応答>

1. 来年度の NBRP 予算配分の結果について

来年度の NBRP 予算配分の結果、東大・科博は、GBIF 用の予算額が確定した（それぞれ 28 年度配分額の 96%）が、遺伝研の中では、予算は ABS, GAIN 他と一緒にの枠であり、GBIF 用の予算を特定する線引きはされていない。来年度早々、遺伝研の担当者、東大・科博との打ち合わせを行い、事業の中での遺伝研の立ち位置について合意することが必要である。

2. S-Net について

1) GBIF は緯度経度情報、採集年月日情報を重視しているようだが、S-Net はそれに追従するのではなく、国内の需要に応じて、性別、生活環などもっと展示・研究につながる生物学的情報も表示すべきではないか？

⇒ 現在の活動では、GBIF にデータを提供することが優先であるため、S-Net はその枠内で充実させるということは可能である。ただ、展示・研究などに使える写真の公開については著作権の扱いの問題やデータ提供者の知識の問題等のため、時期尚早である。

⇒ 生物学的情報を入力できるかどうかは、それまでの標本についての調査の有無や、入力時に手元にあるデータの質に左右されるだろう（標本の採集場所、性別、体長などを測定・整理してあるかどうか、など）。

⇒ データの内容によっては、私有地情報との絡みで詳細を公開できない場合がある。

⇒ S-Net の内容については、会合の機会に、各博物館にどのような情報を表示すべきか等について意見を聞くことが望ましい。

⇒ S-Net 創成期の頃とは担当者も変わっていると思うので、一度ワークショップを開いて課題抽出が必要である。

2) 博物館で使える資料として S-Net で種名などの展示パネルを整備するという案があったが？

⇒ 一度作ってしまえば使い回しができてよいと思う。分野ごとに専門家に頼むことで実現できるかもしれないが、かなりの労力が必要である。

3) 化石は登録できるか？

⇒ GBIF では登録できる。S-Net では検討中である。

2. OBIS との連携について

1) OBIS との連携は来年度以降も続くか？

⇒ 続く予定。データ整備については OBIS の方が JBIF より進んでいるため、現在 JBIF 側のデータを送って統合の方式を模索中である。

⇒ GBIF-OBIS 間は GBIF が OBIS のテクニカルサポートを行う関係にある。両機関の提携は各国が国内でやることとなっているが、実際にはできないことが多い。日本の例は特殊であり、今後も協力関係をアピールしていくべきである。

3. GBIF について

1) 台湾、中国など、アジア各国では GBIF はどう機能しているか？

⇒ 台湾はアジア一進んでいるが、主要人物が居なくなり、現在立て直し中である。

中国は国としてではなく CAS（研究機関）として参加している。中国独自のネットワークをアジアにつくろうとしており、GBIF と折り合うかどうか不明。インド

ネシアは技術的には進んでいるが、国内ノードである InaBIF が機能していない。

フィリピンは準参加国 (associate) として参加しているがデータが出てこない。

2) アジア各国で、個人的に持っている良いデータが GBIF に入っていない場合、個々に勧める方法はあるか？

⇒ BIFA の活動は国レベルで、個人には対応していないので、個人に対しては別の方法での周知が必要である。

⇒ GBIF 関係者を紹介 (台湾のシャオ氏、中国のマー氏など) することもできる。

3) GBIF の持つような出現データ情報のみで、どれだけの利用ができるのか？

⇒ 分布境界を調べる時などに重要。その種の生育情報から (外国産のものをはじいて)、日本の固有種を検討する、などの時にも利用できる。

⇒ 出現情報は貴重であり、いろいろな場面で使える。

⇒ これまでデータの利用が少なかった理由の1つに、データ自体が少なかったことがある。現在、データ数が増えたことで、情報が利用しやすくなってきている。

4. その他

環境省・荒牧氏より、現在環境省が地球規模の課題として気象問題を議論している科学技術イノベーション会議において GBIF を紹介した旨の報告があった。

以上